



火災後、復活新装なった「芝楽」  
=1962 (昭和37) 年頃・青森県所蔵県史編さん資料

1962 (昭和37) 年5月13日、店舗内から燃え上がった火が原因で芝楽は全焼した。しかし素早く復興を新聞で知らせ、2ヶ月余りたった8月3日に再開店を果たした。ねぶた祭りの開催に合わせたのである。津島は新しいもの好きで、常に時代を先

1953 (昭和28) 年8月10日、青森市新町通り北側の県庁通り沿いに大衆割烹の「芝楽」が開店した。店舗は現在の喫茶店マロンの向かい側にあった。創業者の津島勲は、芝楽開店の2年前、新町通りの東寄りにあつた松木屋デパートの斜め前に、寿司屋(つしま本店)という寿司屋を開店

させた。芝楽は寿司屋の支店だった。当時の庶民のごちそうは、寿司・天ぷら・ウナギ・釜飯・すき焼きなど、主に和食料理だった。戦後のアメリカ文化の影響で洋食も人気があつたが、敗戦前後の食糧難を経験した世代にとって、和食料理を安価で腹一杯食べられる店が好まれた。

取りしていた。電子レンジや自動食器洗い機を導入したのも、当時の青森県ではかなり早かった。女性定員の制服は白い襟をつけた紺ないし空色のワンピースに、三つ折りの白い靴下を履いたものだった。彼女たちの接客や応対は好感を持たれていた。新店舗に設けたエスカーレーターは、県内で最初に導入したカネ長武田百貨店とほぼ同じ時期だった

店名を「芝楽」と名付けた。彼の経営理念がわかると思う。芝楽の看板広告をはじめ、マッチや箸袋の図柄などは、すべて洋画家の古川孝八郎が書いたものである。古川は広告美術作家としても活躍し、青森県卓越技能者知事賞を受賞している。津島とは大変仲が良く、芝楽の広報担当者的存在だった。彼の描く愛嬌のある絵

は1987 (昭和62) 年4月9日に死去し、店舗は息子たちが経営していた。閉店に際し、創業42年に因んで寿司・釜飯・天ぷら定食を、いずれも420円の安さで1日500食分用意し、売上金100万円は全額青森市の藤聖母園に寄付された。同園は戦災孤児や戦後の混乱期に食糧難などで親と暮らせない子供たちを預かる施設だった。

## 大衆割烹「芝楽」の42年

戦後の飲食娯楽史を考える

中園 裕

(県史生活文化課  
県史編さんグループ主幹)

ので、後々までの語り草となった。第一次産業が中心だった当時の青森県では、家族揃って街中で会食をする機会はいくつもあった。正月やお盆などで、家族や親戚が揃って会食することは、何よりの楽しいひとときだった。家族の集いのごちそうだったのだ。津島は、芝生の上で風呂敷を敷き家族で食事する楽しさを理由に、

入れることが多かった。それほど愛され人気のある芝楽だが、洋食が日本人の食生活に定着し、ファストフードやファミリールレストランの進出で苦境に立たされた。何よりも自動車社会に適應できる駐車場のなかったことが大きな打撃となった。

1995 (平成7) 年6月25日、芝楽は42年間の歴史を閉じた。創業者の津島は、飲食店の経営姿勢、職人や従業員の生き様、その店に足繁く通った客人たちの様相について、後世の我々に色々なことを教えてくれている。同時に政治史や経済史だけでなく、飲食娯楽史をはじめ生活史の記述が大切であることも、教えてくれているように思えてならない。